

---

# 《Lost》 失いし者達

見たら死ぬ死神

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

《Lost》失いし者達

### 【Nコード】

N8705M

### 【作者名】

見たら死ぬ死神

### 【あらすじ】

Lost: 失った物を取り返す為、失った物に贖罪するため、それを人に味合わせるため、人は戦う。  
これはそんな欠如した者達が戦う物語。

これは仮面ライダーの二次創作です。基本オリキャラ重視でいきます。おやつさんは出ません。

そういうのを不快に思われる方は引き返して下さい。自己責任でお願いします。

## プロローグ（前書き）

はい！録速録終わってないのに次回作作ったよorz

絶望は俺のゴールだ…。

スカルはおやっさんイメージ強いですが、脱却して読んで下さい。

それではございませぬ。

## プロローグ

さて、ここにいる皆さんは何かを失った事はあるだろうか。

それが何かとは言わない。友、家族、富、名声、誇り、仕事、夢…… などなど。余程のお金持ちの坊っちゃんでない限り人間なら一度は味わうものだろうと俺は思う。

何故こんな質問をしたのかと言うと、今俺はその一度失ったものを欲しているからだ。

「一度失ったのに往生際の悪い事を」と思う人もいるかもしれない。確かに世の中は時間と法で支配されている。失敗した過ちは戻ることなく進むし犯罪を起こせば出所しても社会に居場所を作りにくくなる。

ああ、紹介が遅れたが俺は「骨塚 骸」だ。どうだ、酷い名前だろう？ そんな事を考えながら俺は今日の前の怪人と生身で戦っている。怪人の名前はマスカレイドローパント。どこぞのショッ◯の様にドローパントの中では下っ派である。

俺は戦闘経験は皆無なので適当に拳をブン回しているだけなのだが下っ派故当たる当たる。

しかし、撤退や消滅もしないので拉致が明かない。仕方なく懐から機械の様な物を取って出し腹に突き出すとベルトが巻かれ、俺はもう一つ取り出したUSBメモリの様な物のスイッチを押す。

### 【Skull】

そのままベルト右のスロットにメモリを押し込み右に倒すと激しいギター音と共に骸骨を催した装甲が俺の身を包む。

これが仮面ライダースカル、というらしい。

変身したと同時に胸に付いていた銃スカルマグナムを構えて言う。

スカル

「骸になりたいなら…来な。」

言っておくが俺が失った物は二つ。

「まともな人生」

と

「相棒兼恋人」だ。

## プロローグ（後書き）

主人公の名前はとにかく、骨骨骨ですね。（笑）  
ネーミングセンスがない？

（川、ー、）

何、気にすることはない。

スカルのかつこよさはすごい。考えた人天才！

基本東方緻速録が優先なので更新は鈍いです。むしろ短編扱いかな。

## 第一話 万屋のスカル（前書き）

こちらでも更新します。どうぞ。

## 第一話 万屋のスカル

俺は今屍の山の前にいる。それは少し発光して蒸発していった。あの後、スカルのマキシマムドライブでマスカレイド達を片付けた。ロストドライバーからメモリを抜き変身を解く。

「ったくたまには休ませてくれよ…。」

疲れた体を引き摺って帰ろうとした。しかし、背後からいきなりマスカレイドが襲いかかってきた。閉まったドライバーを再度取り出そうとしたが間に合わない。拳が飛んでくる…はずだった。俺の目の前を一迅の風が通るとマスカレイドは爆発した。俺のいる廃工場の二階の手すりにそいつは座っていた。

地上絵の記憶を宿した赤色のナスカドーパントだ。

そいつも変身を解く。腕から青色の端子のメモリT2ナスカメモリが出てきた。

「危ねえ。大丈夫か骸。」

「ああ。助かった。」

こいつは幼なじみの那須 和幸だ。俺が唯一心を許してる。実力は申し分なく、和幸以上にナスカメモリを使いこなせた奴を見たことがない。スカルでさえまとともに勝負したら負ける。その前に俺が実力皆無だが。

和幸が飛び降りると俺は歩き出した。

「仕事ハードだな。メモリ使用者が増えてきてる。」

欠伸しながら和幸も頷く。

ここで説明しとくが俺の街は丁度一年前からある秘密結社が造った  
ガイアメモリって言ったUSBが流通していた。とは言っても扱  
いは麻薬と同じだ。

それによる暴行やら死亡事故やらが多発。

そして半年前には旧型ガイアメモリから改良を加えた次世代ガイ  
アメモリ、T2ガイアメモリが街上空からバラまかれた。AからZの  
アルファベット26文字のガイアメモリはそれぞれ欲望や願望がメ  
モリの能力に近いものに惹かれていき、適合性の高い人間は大丈夫  
だが適合性の低い人間は無意識に暴れるようになった。勿論無差別  
にドーパントに変身させた。更にその後、旧型ガイアメモリがバラ  
まかれ街は犯罪の絶えない魔都と称されるまでになった。

その一連の流れで俺はスカルのメモリを手にし、恋人を巻き込み死  
なせた…。

そして今は復讐の為に秘密結社を探しながら和幸と万屋をやっ  
てい  
る。

「それにしては報酬はケチる奴ら多いから生活大変だよ。それに仲  
間増えねえかなー。」

和幸の愚痴は最もである。ガイアメモリがバラまかれてから経済も  
あつたもんじゃない。全ての人とは言わないがまともに生活を送れ  
ない世の中だ。その中で依頼してくる人間は珍しく余程の金持ち。  
しかし、そいつらでさえも依頼報酬を頻りに削ろうとする。舞い込  
んで来る仕事もほぼガイアメモリ関係。それらをこなすのには二人  
では手一杯になりつつあるのが現状だ。

「駄々こねても仕方ないだろ。今は食いぶちあるだけありがたいと  
思いな。」

「んなのは分かってらあ。」

他愛のない話をしながら高速道路の下を歩いていると爆音と悲鳴が聞こえた。

「…まったく俺を過労死させる気が…。」

「ドンマイ。まあ、行くか。」

悲鳴が聞こえた方に 駆けつけると青いドーパントが逃げる女性に向かつて右腕に合体した銃で発砲していた。足から血が出ている女性に ドーパントが叫んだ。

「だからよお！お前も俺等の仲間になれよお！」

対する女性は…

「嫌！チンピラとつるむのなんてお断りよ！」

どうやら組織への勧誘を断られたらしい。それでつけ回す、しかもドーパントでは最低の極みだ。俺は直ぐ様ロストドライバーを取り出す。

「あらら。骸スイッチ入っちゃった。怖い怖い。」

和幸の言葉も無視してメモリを押す。

【SKULL】

「変身。」

スカルに変身してマグナムを構える。

「和幸。お前は女性の方を頼む。」

「トホホ…。またそんな役かよ。」

不満げに和幸はナスカメモリを構える。

【NASC A】

それを右腕に押し付けると光と共に赤色のナスカが現れる。ナスカは直ぐに高速移動に入り女性を抱えて移動する。目の前から女性が消えた事に驚くドーパント。

「何！？何処いった！？」

一方女性も驚いてお姫様抱っこされていた。

「！？な、何なの！？貴方誰！？」

「通りすがりの紳士な人間ドーパントです。取りあえず暴れないでね。襲う気ないから。」

青いドーパントは視界から消えた女性を探していたが一発の光弾が視界を遮る。

向かってきた方向を見るとスカルがそこにいた。

「なんだてめえは！？邪魔すんなよお！」

「このDONが…レディの扱いを知らない奴は俺が殺す。」

スカルマグナムを乱射。しかし、相手も自慢の銃で光弾を全て叩き

落とした。

特徴からしてあのドーパントはトリガードーパントだと理解した。

「ヒヤッハー！どうだ、俺の力はよお！！」

DQN どうせてめえは 噛ませだよ

我ながら上手い句を思い浮かべながら上がった身体能力で一気に接近。パンチキックのコンビネーションアタック。銃で受け止めようとするのを左手で掴みそのまま殴り続ける。

「く、くそおべぶあ！？」

蹴りを入れて間合いを開けるとマグナムにメモリを差し込む。

【SKULL MAXIMUM DRIVE】

破壊光弾スカルパニッシャーをトリガーに放つ。

「ぐわあああ！！」

大きな爆発。汚え花火だ。

普通ならここでガイアメモリは体内から抜け出してメモリブレイクされるのだがT2ガイアメモリはブレイクされずに残るため、直ぐに変身出来るのだ。

俺はメモリを確認して回収。ただのチンピラと化したDQNはまだ意識があるようだ。

「か…返せよ。」

「…返せだ？下らねえ事言ってんじゃねえ。暴力にしか使う脳みそのためえにやるメモリはねえよ。まあ、これから死ぬ奴にそんなこと教えても無駄か…」

そしてスカルマグナムをDQNの頭に照準。

「ちよっ…まつ」

「じゃあな…。」

返答なんて聞いてられない。祈りながら頭に二発、心臓に二発。奪った命は自らの生の為に。格好づけで出来やしない。これが現実。油断すれば自分が死ぬ。不確定要素は排除すべき。それが俺の生き方。血飛沫の上がつた死体を見下しそこを後にした。

集合場所に集まると和幸と女性がいた。二人が振り向く。

「おっ、お疲れ。メモリは回収した？」

「ああ何とか。…とはじめまして。俺は骨塚 骸。この町で万屋をやってます。こっちは相棒の那須 和幸。貴方の名前は…」

「私は南 まどか。さっきはありがとう。貴方達がこの町の万屋？なら頼みがあるんだけど…」

「取りあえずその怪我じゃ不味いな…止血してから事務所に行こう。話はそれからだ。足だして。」

「う、うん」

彼女の履いているジーパンから血が滲み出ている。量からして致死にはならないがほっとけば悪化すると思ったからだ。彼女は少し顔を赤らめている。別にかっこいいことしてないぞ？  
ジーパンを捲って包帯で止血すると彼女を背負う。わひゃっなんて奇声だしやがって。

「そつだ。私もガイアメモリあるの。これとこれ。」

出された二つのメモリ。俺は驚愕した。JとE、そしてとんでもない事に巻き込まれたのを俺たちはまだ知らない。

## 第二話 依頼（前書き）

Wが終わりオーズへ。オーズ意外とかつこよかった。メダルは斬新だったな。

説明されていないドーパントや必殺技などは自分の脳内妄想です。あしからず。

感想待ってます。

## 第二話 依頼

何処にでもある普通の雑居ビルの二階。その中の広い部屋が俺達の事務所だ。三人は今のソファーに座り目の前のガイアメモリを眺めていた。JとEのメモリにはjokerとeternalと書かれてあった。

拾ったにしては可笑しいよな。少し聞いてみるか。

「まず、これをどこで?」

「拾ったの。」

予想d: エエエエ(、) エエエエ

予想通りすぎる。

しかも拾ったって事は道にでも落ちてたのか?だとしたら危なかったな。

と、考えていたらまどかさんがこっちを見てた。面倒だが説明するか…。

「どうしましたか?」

「ん…取りあえずこのメモリの説明をしよう。君の拾ったのはバラまかれたT2ガイアメモリの中でも強力な力のあるメモリだ。特にEのメモリはその中でも最強に相応しい力がある。邪な考え持つてる奴ならまずは世界征服って感じの代物だ。」

「そんな力が…。」

ちょうど話が切れた所に和幸がお茶を淹れて持ってきて告げる。

「まあこちらは悪用するつもりはないから大丈夫だよ。はい、那須印特製のお茶だよ。」

置かれた湯飲みを三人で飲む。

「美味しい！凄く美味しいです！」

「ま、特製ですから」

「なーにが特製だ。市販の○右衛門の癖に。まあ、うまいのは確かだが。いけね、話がずれた。」

「で、まどかさんがいいならこのメモリは自分達が預かりますが…。」

「少し考えた顔をしている。無理もないだろ。拾ったメモリが実は世界を破滅させるなんて分かったなら渡すのも戸惑うよな。」

「うんいいよ。というかそれが依頼の一つだから。」

「案外あっさりだな。まあいいか。」

「二つのメモリを掴んでポケットにしまう。」

「信頼してくれてありがとう。で、他にも依頼が？」

「はい、依頼内容は…復讐です。報酬は一千万。」

隣にいた和幸が横で小突く。粗方内容は分かっているが…。

「骸。復讐する相手って…。」

「ああ、この町にガイアメモリをバラまいた組織…だな？」

顔を戻すとやはり頷く。その顔は見たことがあった。憎悪の顔だ。自分と同じだ。

前にもこういつた奴はよく来ていた。大方の理由は家族や恋人などがガイアメモリに巻き込まれて死んだのだ。それを復讐するのにこいつた所を訪れるのは納得がいく。警察など国家機構は役立たずだしな。だが、こちららその組織を追跡中の身だ。依頼を叶えられない状況故、今回の依頼も断んなくちゃいけねえか。

「悪いがその依頼を引き受ける事は出来ねえ。」

まどかさんは目を見開いた後、握っていた拳をワナワナ震わせていた。

「どうしてですか！？額に不満があるならもつと増やします！ですから…」

「その組織を追跡してるんだよ俺達も。居場所も分からねえし直ぐに達成できる訳じゃない。」

落ちて着けようとしたが逆効果のようだった。身震いが増したかと思うと今度は手を差し出してきた。

「じゃあ、さっきのメモリを返してください！」

「やめとけ。いくら最強の力でも組織相手に行ったら返り討ちだバ

「ロー。てか、力に吞まれて暴走するのがオチだ。取りあえず…っ  
てうお!?!」

身乗り出してきやがった!

ソファから転げ落ちて取っ組み合いになる。

「ばか!そんなことしても…「それでも!」!?!」

「私は復讐するの!!!大切な家族を…奪われたんだから!!!」

大声の後事務所を飛び出して行った。懐を確認したら二つのメモ  
リが無くなっていた。

「あららヤバイ。追いかけなよ骸。」

「隣でゆっくりお茶飲んでんじゃねえ!」

「気にしない気にしない。で、追っかけんの?」

「ったり前だ。誰かの手に渡れば不味い!後、まどかさんもな!」

ロストドライバーとスカルメモリを取り出し、俺達は部屋を後にし  
た。

まどかside

「ハア…ハア…。」

私は今夜の路地裏を走っていた。

誰かに頼めばどうにかなるなんて…自分が甘かった。

数年前、私は家族を奪われた。なんも変哲もない普通の家庭だった。優しい父と母に可愛い妹。なのにガイアメモリのせいである日突然ドーパントが押し入って…。

いったい私達が何をしたっていうの？何の道理で殺すの？

あの日生き残った私はその組織に復讐すると誓った。

私が味わった苦しみをあいつ等に味あわせてやるために。

走り続けて高速道路の下の柱に差し掛かった…が、

「見つけたぜ。」

突然の声に後ろを振り向くと黒いコートに身を包んだ男がいた。目にはサングラスとデジタル表記のナンバー18の数字が頬に書かれていた。男はそのまま私に歩み寄ってきた。

「誰!？」

放ってくる殺気に恐怖で声を荒げると男は嘲笑う。

「これから死ぬ奴に名乗る名は無い。用件は只一つ、メモリを渡して貰おうか。」

「やっぱり…!渡すわけ無いじゃない!これで復讐するのよ!!あの組織に…!」

エターナルのメモリを取り出しながら私は後ろに後退る。男は歩みを止めなかった。

こんなところで死ぬ訳にはいかない!

「なるほど。なら尚更死んでもらわきゃならない。私達の邪魔をするなら。」

「！？貴方もしかして…」「はい、おしまい。直ぐに吹き飛ばして差し上げよう。」「」

言葉を遮られた拳句男はメモリを取り出して起動する。

【Rocket】

姿が変わる。体色が緑に、全身にミサイルの弾頭が剥き出し頭も弾頭の形をしていた。

ミサイルが全て私に向かって発射された。

怖くてメモリを押せない。全身が恐怖で震えた。どうしたら…どうしたら！

「バイバイお嬢さん。」

ミサイルが目前まで迫った。

(私…死ぬの?)

絶望に目を閉じる。辺りが爆炎に包まれた。

.....

「まったく、手間かけんな。」

…私…生きてる？

気づくと誰かに抱き抱えられていた。  
白い帽子にマフラー、骸骨の様な頭に銃を構えた人が私の視界に映った。震える声で言葉を紡いだ。

「その声…骸さん？」

「ああそつだ。とにかく下がってる。」

悪態を突くと高速道路の柱に私を突き放した。  
啞然として見ると目の前にもう一人和幸さんのナス力が一瞬で現れて後ろを振り向く。

「もう大丈夫だよまどかちゃん。後は任せて。」

その言葉を最後に私は意識を失った。

骸side

ご丁寧に気絶までしてくれちゃって、こっちの苦労も考えろってんだ。

しかしエターナルのメモリで釣れた魚は大きかった。あの組織の一員らしいからな。

「お前には聞きたい事が山ほどある。」

その言葉にロケットドローパントは余裕の態度を崩さず答える。

「今日という日は実にいい日だ。エターナルに加えてジョーカー、スカルまで。私があの方に貢献出来るなんて…。」

「生憎渡すつもりはねえ。てか、ナスカを無視すんな。」

名前を挙げられなかったからか少しキレている和幸。眼中にないと言われている様な物だ。

「お前は要らない。どいてもらおうか。」

あーあ。俺しーらねっと。

「斬殺してやんよ。」

宣言してナスカは超高速の世界に入り相手が反応する間もなく四方八方から切り刻む。レベル3に入った奴のみの領域速度だ。普通のドーパントには捉えられない。

「ガハッ！グッ！舐めるな！」

ロケットはミサイルを全方位にぶちまけた。

少数のミサイルがナスカに向かって追尾していったが速さが足りない。次々とナスカブレードに真っ二つにされて爆発した。

因みに、俺は別方向に行ったミサイルを落としていた。そこらへん廃墟にされたら堪らんからな。さっきのまどかさんへのミサイルも俺が撃ち落とした。

ロケットは膝を付いてる。終わりそうだな。

「ハアアアアア！」

ナスカブレードが光に包まれ刀身が伸びる。それを横一線に振る。

「がああああ！」

爆発と共にメモリが排出された。ロケットのメモリを回収して気絶した男を見た。

「どうする？」

「拘束して尋問かけるか…。」

手を出した次の瞬間…

「！？これは…。」

男の体は粒子になって消滅した。

「証拠隠滅だねえ。」

ちっ、やられた。色々聞き出すことあったのに。

「仕方ねえ。まどかさんを運んでトンズラするか。」

「そうだね。次は骸が運べよ。」

先に言われちゃったか。

まどかさんを背負って俺達は家に帰った。

まどか side

ダメだな私。力を持つてたのに敵に怖じ気づいちゃって。

『貴方にはまだ早いよ…』

誰？

『私は貴方。貴方の心の中に居る…』

何しに来たの？

『忠告。貴方はメモリを使いこなせない。』

何で？

『心が弱過ぎる。それだけでも力は貴方を飲み込む。』

じゃあどうすればいいの？

『簡単よ…守りたいモノ、それを見つければ…』

守りたい…もの？

『答えは貴方が見つけて…』

瞬間目を覚ました。

「あれ…ここ…。」

どうやら私は気絶して事務所に運ばれたみたいだ。

ソファの上で体を起き上がらせるともう夜中。電気は消されていた。

「やっと起きたか。」

「ひゃっ！」

暗がりて声を掛けられた。骸さんだ。びっくりした。

「驚かさないですよ。」

「悪いな。さて、話といこうか。」

骸さんは私の隣に座った。

デカイ。初めはその印象だったがその背中も持ってるものもデカイと感じた。

「取りあえず、依頼は取り消した。ホントに直ぐに奴らを見つけ出すことは出来ない。今日ので実感したたる？」

「うん…。」

悔しいけどそうだった。敵はプロで組織だ。まともに行っても勝てない。あと情報もない。

「それに俺達は金には困ってるが大金は要らない。嘘だったんだろ？あの額。」

バレてた…。私はこの人には嘘つけないと思った。

諦めるしかないのかな。

「あの手の奴らは沢山来たからな。まあ、そこでだ。前にも言ったが俺達もそいつらを追ってる。これも何かの縁だ、俺達と組むか？」

「え？」

「但し、命の保証はしないからな。今日の一件で組織にも目を付けられた筈だ。狙われる対象になる。」

「それって脅迫じゃ……」

「ガイアメモリに関わった人間はいずれそうなる。持論だ。で、乗るのか乗らないのか？」

逃げ道はないのか……。覚悟を決めよう。

「分かったわ。貴方達と組む。」

「じゃあ、改めて依頼は俺達と一緒に組織に復讐する。契約成立だな。」

にこやかに差し出された手を私は握った。そして、心に空いた穴が塞がった気がした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8705m/>

---

《Lost》失いし者達

2010年10月12日18時25分発行